

Title

# 初期近代イングランドを中心とした同性間の欲望の表象

—ソドミー／バガリーと同性愛的表現をめぐって

## The Representations of Desire Between Same-Sex Persons in Early Modern England —Sodomy/Buggery and Homosexual Images

Name

鈴木 悠理

### 抄録

本研究は、初期近代イングランドを中心としたヨーロッパに焦点を当て、その時代における男同士の身体的、性的接触にまつわる言説を分析する。イングランドを含むヨーロッパのキリスト教圏では、男同士の性的な結びつきはソドミーやバガリーと呼ばれ、神に対する反逆的な行為であり、社会の秩序を転覆させかねない大罪と見なされていた。その一方で、ギリシア・ローマ古典を再生産する芸術活動の分野においては、男同士、特に成人男性と少年のあいだに生ずる性的な接触がホモエロティックなものとして美化されることも可能であった。

現代におけるホモセクシュアリティとホモフォビアは、前者が同性間の愛情あるいは欲望、後者がその嫌悪の対極に位置している。しかし、初期近代に用いられていたソドミー／バガリーという非難的な言葉と、牧歌的なギリシア・ローマ神話の再生産のなかにみられる同性間の接触の肯定的表現は、そうした軸の両極に位置するわけではなかった。本研究では、そのどちらもが異教／異郷の他者の表象であり、身体の接触が強制されること、そして少年への嫌悪と性愛が混在しているという共通項を持っていることを指摘する。そして、ソドミー／バガリーとホモエロティックな表現の共存は、先行研究で指摘されたような矛盾ではなく、同性間の性的な欲望という同じ領域における表現のあり方であったことを明らかにする。

キーワード：セクシュアリティ、ジェンダー、少年俳優、ガニユメデス

### Abstract

This research focuses on Early Modern Europe, especially England, and analyzes the discourse on physical and sexual contacts between males. In England and other Christian countries, sexual contacts between males were named Sodomy and Buggery, which people considered as the symbolic act to revolt against God and God's creation. Sodomy and Buggery were treated as one of felonies of the time because they would bring chaos to the society. In the field of art and literature of reproducing Greek and Roman classics, on the other hand, it was possible for artists and writers to describe the sexual contacts between males, particularly between a grown man and a young boy, as something poetic and beautiful.

In today's society, the words homosexuality and homophobia are placed at the very opposites: homosexuality as the love and desire between same-sex persons and homophobia as the hatred against it. However, in Early Modern Europe, the unpleasant words Sodomy/Buggery and the homoerotic representation in art were not placed in the opposites of the axis of same-sex relationship. Rather, this research analyzes that Sodomy/Buggery and the homoerotic representation share three characteristics: 1) they represent the pagan other and the foreign other, 2) the physical contacts are forced, and 3) the mixture of hatred and erotic desire for boys are presented. In conclusion, this research discusses that the Sodomy/Buggery and homoerotic images are not contradictions but different representations in the same field of same-sex desire.

Keyword: Sexuality, Gender, Boy Actors, Ganymede

## はじめに

コレッジョの《ガニュメデスの略奪》(1530年頃, 図1)、マッツァの《ガニュメデスのレイプ》(1575年頃, 図2)、ルーベンスの《ガニュメデスの略奪》(1636-38年頃, 図3)はすべて、ギリシア神話に登場する人間の少年ガニュメデス(ガニューメデース/ギャニミード)が、驚に姿を変えた大神ゼウスに連れ去られる姿を描いたものである。初期近代ヨーロッパではギリシア・ローマの神話や叙事詩をモチーフとした絵画や彫刻、詩といった芸術作品が多く誕生したが、そのなかでもガニュメデスは肌を露わにした少年や青年の姿で描かれ、男性から男性へ向ける愛や欲望の代名詞となった。絵画などの芸術作品を通して同性間の接触が何かしら美しいものとして描写される一方で、ヨーロッパでは長いあいだ、同性間、特に男同士の性的な交渉はソドミーやバガリーと呼ばれる神への冒瀆的行為であり、教会法や世俗の法で裁かれる対象であった。



図1



図2

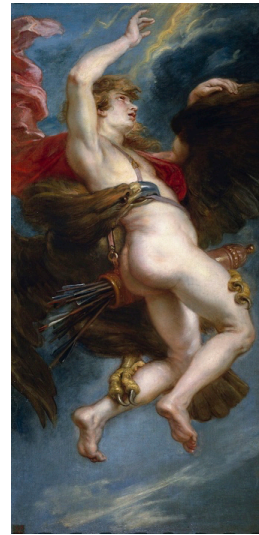


図3

図1 アントニオ・アッレグリ・ダ・コレッジョ 《ガニュメデスの略奪》1530年頃, ウィーン, 美術史美術館

図2 ダミアーノ・マッツァ 《ガニュメデスのレイプ》1575年頃, ロンドン, ナショナル・ギャラリー

図3 ピーテル・パウル・ルーベンス 《ガニュメデスの略奪》1636-38年頃, マドリード, プラド美術館

19世紀に入ると「ホモセクシュアリティ」という言葉が登場するが、同性間の愛情や欲望が肯定的に捉えられるようになったわけではなく、そうした感情や行為が「誰もが行いうる罪」から「特定の人々の病気」と診断されるようになった。ミシェル・フーコー(1986/2009)は、それまでは主に法の分野における異端者としてのソドミーの行為者たちが、心理学・精神医学・病理学によって同性愛者というひとつの種族として扱われるようになったのだと論じた(pp.55-6)。その後、同性愛が罪でも病でもなく、少数派のセクシュアリティとして認められるべきだとの動きが活発になっていく。

初期近代イングランドでは、16世紀後半から17世紀前半にかけて演劇文化が盛んになった。これに着目し、Stephen Orgel(1996)やStanley Wells(2010)たちは、舞台における少年俳優に焦点を当て、彼らのジェンダーが曖昧であることを論じてきた。少年俳優は、当時、舞台に上がることのなかった女性たちに代わり、女性の衣装を身にまとい、女性の役を演じていたからである。しかしながら、こうした研究では、少年がいかにか女性の代替となり、成人男性から欲望の眼差しを受けていたかに着目することが多く、罪と認識されていたソドミーやバガリー

との共通項を明らかにする研究は不足している。例えば Kirk Quinsland (2017 / 2020) は、女性装する少年俳優がソドミーと結び付けられていたことを指摘したが、この少年俳優への批判をホモフォビック（ホモセクシュアリティ嫌悪）だとして、現代に通ずる同性愛／異性愛の二項対立を前提に議論を展開するに留まっている。また、初期近代ヨーロッパにおける男性間の性的な接触についてまとめたヘルムート・パフ（2009）は、ホモエロティックなものへの賛美とソドミー非難を「大きな根本的矛盾」（p.79）と提示している。

本研究は、セクシュアリティやホモセクシュアリティという言葉が不在であった時代において、ルネサンス芸術を通して肯定的に表現された男性間の接触、および男性間の性行為を非難するソドミー／バガリーの概念がいかなるものであったのかを整理し、それらが欲望とその欲望への嫌悪の二項対立をなしていたのではなく、むしろ複数の共通点を持ち、同性間の欲望という同じ領域における表現のあり方の差異であったことを明らかにする。

## 1. 罪としての男同士の性行為

### 1-1 ソドミーとバガリー：不自然な性交の最たるもの

16世紀や17世紀のイングランドには、セクシュアリティやホモセクシュアリティという語は存在していなかった。しかし、フーコー（1986 / 2009）が主張するように、性と権力の関係が切り離せないものであるならば、他のいかなる言葉が、どのような文脈で性的な行為や欲望を表していたのかを考察する必要がある。初期近代を生きた人々にとって、同性間、特に男同士の性的行為や性的欲望がどのように表象されていたのかを理解するために、まず神学と法の分野を中心に語られていたソドミーとバガリーの概念を整理したい。

ソドミーは、旧約聖書に登場する町ソドムに由来する。創世記18章から19章にかけて、不道德なソドムの住人たちに怒った神が町に硫黄と火を降らせて滅したことが記されている。これを姦淫と結びつけ、13世紀には同性間で性行為を行う者たち、特に男性たちをソドマイトと呼び、宗教裁判所の規則によって裁くことが一般的になっていた（ヘルゲメラー、2009, p.57）。なお、神の怒りの原因が姦淫の罪であったことは新約聖書ではじめて明記される。たとえばユダの手紙には、以下のような節がある。

Even as Sodome and Gomorrhe, and the cities about them, which in lyke maner defiled them selues with fornication, and folowed straunge fleshe, are set fourth for an ensample, and suffer the payne of eternall fyre. (The Bishop's Bible, Jude 7)

ソドムとゴモラ、またその周辺の町も、同じように姦淫で自らを汚し、異なる肉を追い求めたため、見せしめにされ、そして永遠の炎の苦しみに苛まれるのである。(ユダの手紙 7)<sup>1</sup>

ここではその姦淫が同性愛的行為であるとの記述はない。しかし、同性愛行為を批判する神学者らによって、こうしたテキストと創世記19章におけるソドム崩壊の場面が関連づけられ、ソドムの人々の罪は同性へ強姦をはたらこうとしたことだと読み取られるようになる。創世記19章ではアブラハムの甥であるロトがソドムに移住しており、ある日ソドムを訪れた二人の天使を自宅に招くが、そこにソドムの住人たちが押しかける。

And before they went to rest, the men of the citie [euen] the men of Sodome compassed the house rounde about, both old and young, all people fro [all] quarters. / And they calling bnto Lot, sayde bnto hym: where are the men whiche came into thee this nyght: brynging them out bnto us, that we may knowe them. (The Bishop's Bible, Genesis 19: 4-5)

そして彼らが休む前に、町の男たち、すなわちソドムの男たちが古いも若きもこぞって押し寄せ、家の周りを取り囲んだ。/ そして彼らは口に向かって叫び立てて言った。「今夜お前のもとにやってきた男たちはどこにいる。出せ、我々が彼らを知ることができるように。」(創世記 19: 4-5)

ソドムの住人の言う“knowe”は、聖書においてしばしば「性的関係を持つ」の意味で登場する。ソドムのエピソードでも、天使二人を出せと迫られたロトは、天使の代わりに男を「知らない」自分の娘を差し出そうとする。

Behold, I haue two daughters whiche haue knowen no man, them will I bryng out home bnto you, and do with them as it [seemeth] good in your eyes: only bnto these men do nothing, for therefore came they under the sahdowe of my roofe. (The Bishop's Bible, Genesis 19: 8)

みなさん、私には男を知らない娘が二人おります。彼女らをあなた方に差し出しますから、あなた方の好きなようにしてください。ただ、あの人たちには何もしないでください。私の家の屋根の下に身を寄せたのですから。(創世記 19: 8)

天使と娘たちを互換可能なものとして扱うロトとソドムの人々のやりとりからは、ソドムの人々の性的な欲求を読み取ることができる。このソドムのエピソードは、レビ記や申命記、コリント信徒への手紙一の特定の節とともに、同性愛的行為に反対する神学者らによって、それを道徳的な罪だと非難する際に引用されてきた (Greenough, 2020, pp.97-8) <sup>2</sup>。

旧約聖書に起因するソドミーの語に、不自然な性交であり大罪であるという地位を与えたのは、中世の神学者たちである。13世紀にはスコラ学の神学者たちによって合理的な宇宙起源論と宇宙論が構築され、不自然な性行為に対する「科学的な」批判が集中した (ヘルゲメラー, 2009, p.63)。例えばドミニコ会修道士のトマス・アクィナス (1224/25-1275) は、著作『神学大全』の第二部第154題の第11項から第12項にかけて、性における人間の本性に反する悪徳は淫蕩の一種であり、さらに淫蕩の諸々の種類のうちで最も重い罪だと主張している。

トマスのいう「本性に反する悪徳」は、以下の四つに分けられる。第一に全く性の交わりなしに射精する mollities (自慰)、第二に人間の種に属さないものとの bestialitas (獣姦)、第三は男性同士や女性同士など正しくない相手との性交をを指す vitium sodomiticus、そして第四に、正しくない身体の器官を用いる、あるいはその他の獣のような交わりの仕方を行う modus concumbendi である。この四つに分類された行為は、近親姦や処女凌辱、人妻の略奪よりも重い罪、つまり諸々の淫蕩のなかでいちばん重い罪とみなされた。なお、この四つの「本性に反する悪徳」のなかでも罪の重さが決められており、獣姦が最も重い罪だとされた。次いで男性同士あるいは女性同士の行為、正しくない器官や体位による行為が続き、一番軽い罪として自慰が位置付けられている (アクィナス, 1991, pp.93-7)。

ソドミーと同じく、不自然な性交渉を表すために使用された言葉が、「ブルガリア」<sup>3</sup> を語源とするバガリーで

ある。この語は、11世紀初頭頃よりブルガリアから西ヨーロッパへやってきたカタリ派信徒たちへの非難に由来する。カタリ派は純潔・知識・苦行の道を追求め、物質世界に属する豊穡や繁殖、ひいては結婚や家族を望ましからぬものとしたが、これをカトリック派によって「不自然な性行為を認める者」と批判、迫害されたのである（ヘルゲメラー、2009, p.64）。その後、この語はイタリアやフランスなど大陸からイングランドにも伝わり、ソドミーと同様に不自然な性交渉、特に男性同士の同性愛的行為を指す言葉として使われるようになる。

こうしてキリスト教圏の文脈で定義されたソドミーおよびバガリーは、時に口にするのも恐ろしい行為とみなされていく。初期近代イングランドにおける男同士のホモソーシャルな関係を研究した Alan Bray は、ソドミーがそれほどまでに嫌悪されたのは、それが神の創造した秩序から逸脱する、神と自然への反逆を意味する象徴的行為であったからだと論じた (Bray, 1981, pp.13-32)。地獄や悪魔ですら神の創造の一部であった世界において、ソドミーやバガリーは神の創造物ですらなかったため、最も不自然な行為であり、社会秩序を転覆させかねない大罪とみなされたのである (Bray, 1981, pp.22-6)。

しかしながら、実際にはすべての同性間の性行為が糾弾、処罰されたわけではなかった。また、同性間の性的な接触が全て罪の意識を持ってなされた、あるいは表現されたわけでもない。この点を理解するために、まず初期近代イングランドにおけるソドミー／バガリーに関する法について、次項で整理する。

## 1-2 初期近代イングランドにおけるバガリー法：ヘンリー八世からジェームズ一世まで

イングランドにおける法の分野でソドミーの語が初めて登場するのは、1290年頃に制定された教会法フリータ (Fleta) とブリトン (Britton) である。フリータには、「ユダヤ人の男や女と関わる者たち、獣姦を犯す者たち、そしてソドマイト (ソドミーを犯す者) たちは、これらの行いに携わったと法的に証明され、有罪判決が下された後、生き埋めにされる」とラテン語で記されている (Bailey, 1955, p.145)。教会法ではなく国会の法でソドミー／バガリーが裁かれるようになるのは、1534年のことである。イングランド国教会を設立したヘンリー八世 (在位 1509-47) のもとで施行された通称 1533 年バガリー法は、1534 年 1 月 19 日に法案が提出され、同年 2 月 7 日に可決された (Johnson, 2019, pp.325-6)。正式には An Act for the Punishment of the Vice of Buggery (悪行バガリーの罰に関する法) と命名されたこの法は、その罰則について以下のように規定している。

For as much as there is not yet sufficient and condign Punishment [...] for the detestable and abominable Vice of Buggery committed with Mankind or Beast: [...] and such Order and Form of Process therein to be used against the Offenders as in Cases of Felony at the Common Law; [...] and that the Offenders being hereof convict by Verdict Confession or Outlawry, shall suffer such Pains of Death, [...]. (Great Britain et al., 1811, “anno vicisimo quinto HENRICI VIII (A.D. 1533-4)” CAP. VI., p.145)

人や獣に対して行われる忌まわしくおそろしいバガリーという悪行に対して [...] 有効で十分な罰則が未だ存在せず [...] そして、そして重罪の判例に見られるようにコモン・ローのもと、秩序と法則の措置が違反者たちにたいしてとられるべきである; [...] そして、自白か法外措置により有罪の判決が下された違反者たちは、死の痛みに苛まれるであろう [...]

このバガリー法は、その後のエドワード六世 (在位 1547-53) の時代にも受け継がれたが、メアリー一世 (在位

1553-58) の在位中に破棄される。ただしこれは、ソドミー／バガリーを裁く法自体がなくなったわけではなく、カトリック教徒であったメアリー一世のもと、教会法の領域に戻されたのである。その後、エリザベス一世（在位1558-1603）の時代に再び国会の法として施行され、1861年になるまで、有罪判決を下された者を死刑にする効力を持っていた。

なお、ソドミーに対する罰則が死刑だというのは一見すると、とても厳しく無慈悲であり、この点からソドミーが特別に恐れられていたようでもあるが、死刑や拷問に対する人々の認識は、時代によって変化するものであると理解しなければならない。エリザベス朝では、殺人のように現代でも凶悪犯罪に分類される行為の他にも、放火や魔法の使用、さらには食物や家畜の窃盗もまた死罪となりえた。確かにソドミーや獣姦は有罪判決が下れば死刑であったが、それはこうした行いがとりわけおぞましいものだと認識されていたのではなく、現代よりもはるかに多くの行為が死刑の対象となっていたということである。

ヘンリー八世の時代に教会法ではなく国会の法での処罰の対象となったバガリーだが、実際のところ、バガリー法は聖職者を裁くために用いられていた。ヘンリー八世の時代は、バガリー法の標的となったのは主にカトリック教徒であり、この法律によってヘンリー八世とカトリックとの断絶が強まった (Smith, 1994, pp.43-7) <sup>4</sup>。また、バガリー法が聖職者以外に対して適用されたのは1631年、第二代カースルヘイヴン伯爵マーヴィン・トゥシェットがソドミーと強姦の罪で裁判にかけられ、処罰された時が初めてである (Stymeist, 2004, p.233)。なお、エリザベス一世とジェームズ一世が治めた68年のあいだで有罪判決を受けたのはたったの六人であり、これは同期間における獣姦の有罪数の六分の一ほどであった (Wells, 2010, p.34)。

ソドミー／バガリーは個人間のパーソナルな性行為ではなく、社会秩序を崩壊させかねない社会的犯罪であったが、その行為が個人的なものにとどまり、また男女の婚姻を阻害しなければ、大きく取り沙汰されずに裁かれない場合もあった。そのひとつが少年売春であるが、他にも家庭の使用人同士や学校内における記録も存在する。学校内の例として、1541年にイートン校のニコラス・ユーダル校長が昔の教え子のひとりと同性愛の関係を結んだとのスキャンダルに巻き込まれたことが枢密院の調査書に、1594年のエセックス州グレイト・テイのクック校長が「生徒たちに淫らな行為をする人物」であったと報告されたことが教会裁判所の記録に残っている (Emmison, 1999, p.47; ブレイ, 2013, p.79)。ところがこれらは同性愛的行為に対する調査ではなく、窃盗事件に関する調査の過程で偶然とられた記録であり、二人の校長は両名とも同性愛的行為による処罰は受けておらず、このことからブレイは、学校内の同性愛的行為は事実上、大目に見られていたのだろうと結論づけている (ブレイ, 2013, p.79)。

## 2. 芸術における身体的接触の肯定的表現

第二節で整理したソドミーとバガリーは、主に宗教、法、政治の領域に出現していたものである。しかし初期近代イングランドの男同士の接触に関する言説を理解するためには、その接触が肯定的に表現されていたケースにも目を向ける必要がある。パフ (2009) は、初期近代のヨーロッパでは、ソドミーという非難的な言葉と同居するように、芸術作品を介したホモエロティシズムへの賛美も存在していたことを指摘し、それを矛盾だと論じている (p.79)。ルネサンス期には古代ギリシア・ローマの哲学書や神話、叙事詩が盛んに読まれ、また神話や叙事詩の登場人物をモチーフとした絵画や詩などの作品が多く誕生した。そのなかでパフが指し示すようなホモエロティックなものの賛美は、主に男神が人間の少年や青年を見染めるエピソードに現れる。初期近代の芸術作品のなかで再生産された彼らの物語には、ソドミー的なものに対する嫌悪がなく、牧歌的あるいは幻想的に描かれることも少なく

なかった。実際にパフ（2009）は、ヤコポ・カラーリオが1527年に制作した画におけるアポロン神と少年ヒュアキントスの身体的接触は性愛を示唆していると論じている（p.95）。

初期近代において有名であった存在のひとりが、ギリシア神話の少年ガニユメデスである。彼は初期近代の芸術作品に少年あるいは青年の姿でたびたび登場する。例えばウィリアム・シェイクスピアの『お気に召すまま』（1623年初版）では、ヒロインのロザリンドが男装する際に自らをガニユメデスと名乗り、そのガニユメデスがジュピターから寵愛を受けていることに言及する。神話に登場するガニユメデスは人間の少年であったが、その美しさに目を奪われたゼウスに攫われ、天上の給仕人（a cupbearer）として仕えることとなった。ガニユメデスを誘拐したのは鷲に変身したゼウスとも、ゼウスの使いの鷲とも、あるいは『イーリアス』によると複数の神々とも語られている（呉，1969／1970, pp.58-9）。

図1《ガニユメデスの略奪》では、鷲の姿をしたゼウスと彼に攫われたガニユメデス、彼らを見上げる犬の姿が描かれているが、ガニユメデスの誘拐は美しい風景のなかで行われている。また、ガニユメデスは誘拐犯である鷲にしがみついているものの、その顔には恐怖や嫌悪はなく、うっすらと笑みを浮かべているようにも見えるのである。

初期近代イングランドにおける男同士の接触は、宗教や法における言説や実生活での経験と、芸術作品を通じた肯定的な表現とを別の文脈において考察すると、それぞれがホモフォビア、同性愛という現代の二項対立に通ずる概念であったかのようにも考えられる。しかしながら、ソドミーとホモエロティックな表現はホモフォビア／ホモセクシュアリティのようにはっきりと分断されうるものではなく、その境界は時に曖昧となる。この点について、次節にて同時代の人々がソドミーと呼び、おぞましいものだと糾弾した行為と、絵画や文学を通じて表現していた性的な欲望を比較しつつ、このふたつの共通点を明らかにしたい。

### 3. ソドミーとホモエロティシズムの共通項

#### 3-1 ホモセクシュアリティ以前の同性間の欲望

男同士の性的な接触は、罪であるソドミーとして糾弾されることもあれば、規範に認められたホモエロティックな表現と捉えられることもあった。しかしながら、ソドミーとホモエロティシズムは、男性同士の性的欲望という軸における二極の両端に位置していたわけではなく、いくつもの共通項を持っていた。それは、そのどちらもが、社会的あるいは身体的に同等でない二人の間に生ずる身体的接触を前提としており、かつ少年のイメージを通して表象されていたということである。そして、ソドミーとホモエロティシズムの現象は、ホモセクシュアリティのように二人の男性の主観やアイデンティティを表すものではなく、外から貼り付けられた「他者」としてのラベルであった。

パフ（2009）は、初期近代ヨーロッパの同性間の親密性を整理するにあたり、神学的・法的に非難されていたソドミーの概念と、芸術作品におけるホモエロティックな賛美は「矛盾」であると示した（p.79）。また、Quinsland（2017／2020）はシェイクスピアの『夏の夜の夢』（1600年初版）に言及しながらソドミーの言説を分析したが、同時代においてはホモエロティックな行動とアイデンティティとしてのホモセクシュアリティはほとんど区別されていなかったと論じ、それを批判するものとしてのソドミーをホモフォビアと置換可能な概念として扱っている（p.75-6）。Quinslandは、ソドミーとホモエロティックな表現の類似性には言及していないのである。

Quinsland はソドミーとホモフォビアとを同一のものとして議論を展開したが、異性愛／同性愛の二項対立のセクシュアリティを基軸にしたホモフォビアは、近現代の概念であろう。一方で、初期近代イングランドにおけるソドミーあるいはバガリーは、同性間の愛情や欲望そのものへの嫌悪ではなく、生殖機能を有さないことへの嫌悪であった可能性がある。

自己定義としてのセクシュアリティが存在していなかった初期近代において、セクシュアリティに近い概念は、生殖機能の有無であった (Stanivukovic, 2006, p.232)。そのため、結婚も性行為も、子を為す可能性があるもの以外はおよそ不自然なものとされていた。男性同士の肛門性交は確かに不自然と見なされていたが、それと同じように男女間であったとしても、肛門性交や口淫も不自然な行為だったのである<sup>5</sup>。上述したトマス・アキナスの『神学大全』においても、ソドミーそれのみが批判されるべき大罪となつたのではなく、生殖の可能性がない獣姦や自慰行為と同じ文脈で語られていた。

ソドミーとホモエロティシズムは、どちらも生殖とは関係のないところにあつた。これを背景として、神学的にも法学的にも罪であったソドミーを悪、ルネサンス美術や文学において肯定的に描写されることがあつたホモエロティックな表象を善であると単純に捉えることはできない。実際は、ソドミーとホモエロティシズムはどちらも非常に曖昧なカテゴリーであり、同じ現象が時に称賛され、また別の文脈では嫌悪されてきたからである。悪徳であるとされたソドミーは時に、人々の隠された欲望を示唆し、またホモエロティシズムにおけるアイコン的な存在——例えばゼウスに攫われた美少年ガニュメデス——は時に、ソドミーを糾弾する文脈で使用されてきたのである。ソドミーとホモエロティシズムは二極の両端に位置するのではなく、むしろ同じ領域における表現のあり方の差異であつた。

### 3-2 異教の他者、異郷の他者

ソドミーとホモエロティシズムを結びつけるもののひとつは、その異教性あるいは異郷性である。このどちらも異教あるいは異郷の文脈で表象されることが多く、その他者性が強調されている。歴史研究においてホモエロティシズムと分類されてきたものは、特にギリシア・ローマ神話を主題とした芸術作品に現れるが、もとよりギリシア・ローマ神話は、キリスト教以前のヨーロッパの表象であり、キリスト教が不自然だと糾弾した男同士の性交や獣姦が受け入れられる世界であつた。

例えばパーンは山羊のような角を持ち、上半身は人の身体、下半身は二足歩行の山羊の身体をした牧人と家畜の神だが、性欲の強い男神としてのエピソードが残されている。彼は森の繁みに身を隠し、ニンフや美少年を追いかけるのを常としていた (高津, 1960 / 1972, pp.198-9)。イタリアのポンペイ遺跡の出土品には、紀元前 100 年頃に制作されたとされるパーンの彫刻がある。美しい羊飼いのダフニスに笛を教えるこの牧人神は、ダフニスの肩に手をまわし、その顔に好色的な眼差しを向けているのである。また、ポンペイから北西に 20km ほどの都市ヘルクラネウムからは、パーンがヤギに覆いかぶさり、男性器を挿入しようとしている彫刻が出土されている。

ギリシア・ローマ神話の神々や英雄、人間たちの物語は、古代ギリシアの詩人ホメロス (紀元前 9-8 世紀頃?) の『イリアス』や『オデュッセイア』、紀元前のローマに生きた詩人ウェルギリウス (70-19BCE) の『アエネーイス』、オヴィディウス (43BCE-17CE) の『変身物語』や『愛の歌』などにまとめられ、中世や初期近代には翻訳本や絵画、詩や演劇などの形で再生産されていった。第 2 節で論じたコレッジョの絵画《ガニュメデスの略奪》でも牧歌的な背景が描かれており、初期近代ヨーロッパの都市社会から遠く離れた「異教」と「異郷」が構築されている。

しかしながら、キリスト教以前の神々や英雄のホモエロティックな表現は、つねに美しいものとして賛美されて



いたわけではなかった。こうしたキリスト教以前の異教や異国のイメージは、時にキリスト教圏内のソドミー的他者を示唆する文脈でも用いられた。クリストファー・マーロウの戯曲『エドワード二世』（1594年初版）では、主人公エドワード王が忠臣ギャヴィストンに対して持つ愛情が度を越していると、貴族たちが議論する場面が登場する。

## MORTIMER SENIOR

The mightiest kings have had their minions:

Great Alexander loved Hephaestion;

The conquering Hercules for Hylas wept;

And for Patroclus stern Achilles drooped.

And not kings only, but the wisest men:

The Roman Tully loved Octavius,

Greave Socrates, wild Alcibiades.

[…]

## MORTIMER JUNIOR

Uncle, his wanton humour grieves not me,

But this I scorn, that one so basely born

(IV 392-404)

## モーティマー・シニア

偉大なる王たちはつねに寵臣を携えていた。

アレキサンダー大王はヘファイスティオンを愛し、

征服者たるヘーラクレスはハイラスのために泣き、

そしてパトロクロスのためにアキレウスは頭を垂れた。

そして王だけでなく、賢者たちもまた同じように。

ローマのトゥッリウスはオクタヴィウスを愛し、

威厳あるソクラテスは荒々しいアルキビアデスを。

[…]

## モーティマー・ジュニア

叔父上、私を悲しませるのは彼〔エドワード王〕の不貞な気質ではない、

ただ私が軽蔑するのは、あの生まれ卑しい者〔ギャヴィストン〕であり

なお、エドワード王がギャヴィストンに対して特別な愛情あるいは欲望を持っていることは、エドワード王本人の口から何度も発せられる。彼は「私の」ギャヴィストンと何度も強調し、彼と自らの王位を天秤にかければ、間違いなくギャヴィストンを選ぶだろうと繰り返すのである。例えば、エドワードの臣下らによってギャヴィストンが国外に追放された後、エドワードは以下のような台詞を言う。

EDWARD

And makes me frantic for my Gaveston.  
 Ah, had some bloodless Fury rose from hell,  
 And with kingly sceptre struck me dead,  
 When I was forced to leave my Gaveston.  
 (IV 316-319)

エドワード

そして私のギャヴィストンを思って気が狂う。  
 ああ、あの冷徹なフリアイ<sup>6</sup>が地獄からやってきて、  
 そして王の笏をもって私を死に至らしめるのだ、  
 私のギャヴィストンを手放さねばならぬなら。

David Clark (2013) は、ホモエロティックな関係自体は初期近代イングランドにおいて必ずしも転覆的に映るわけではなく、同性間の性的欲望は規範内で表すことも可能であったことを示したうえで、エドワード王の犯した罪はホモエロティズムの問題ではなく、ギャヴィストンに過度の権力を与えたことで国家を転覆の危機に晒したことでであると論じた。つまり、性的な関係を持つことが罪なのではなく、ブレイが論じたように、社会秩序を崩壊させかねない行いをしたことが罪としてのソドミーの本質だということである。エドワード王の逸脱した愛情はモーティマー・シニアの台詞を通し、ギリシア・ローマの哲学者、また神話の登場人物と比較されて、「他者」としての表象が強化されるのである。物語の後半、エドワード王は臣下らの謀反に遭い、最終的には台の上に寝かされて、串刺しになって処刑される。この串刺しは性的な罪を犯した者の処刑に用いられる方法であり、例えばタッド・ディオ・バルトロ (1362/63-1422/23) のフレスコ画『最後の審判』では、口から肛門まで串に貫かれた男たちが、悪魔に鞭打たれて拷問される娼婦たちとともに描かれている (パフ, 2009, pp.78-9)。

ところで、キリスト教圏外の異教とキリスト教圏内の異なる宗派としての異教は時に混合され、ソドミーを示唆する文章に現れることもあった。例えば、1601年に出版されたイングランドの騎士アントニー・シャーリーの旅行記では、キリスト教にとっての異教徒であるペルシアの王と、イングランド国教会にとっての異教であるカトリックの修道士のどちらもが、ソドミー的な欲に支配されている様子が描写されている。ペルシアに到着した騎士アントニーは、その国の王に謁見することを望むが、それはカトリックのアウグスティノ修道会の修道士を通してはじめて実現する (Stanivukovic, 2006, p.240)。

The friar [...] lodged in sir Anthonies house, found the means to haue a Persian curtezan to lie with him [...] if he wanted, hee would hyre a boy sodomitically to vse. And that he was a sodomitically wretch, it dooth appear thereby: (Stanivukovic, 2006, p.240)

修道士は [...] サー・アントニーの邸宅に滞在し、自身とともに寝るためのペルシアの売春婦を用意する手段を見つけ [...] もし望めば、彼はソドミーとして扱う少年を雇うことも可能であった。そして彼はソドミー的に卑しく、それ [少年] はそこへ現れたのである。

この文脈において、異国であり異教を信ずるペルシアと、その国の王に懐柔されたカトリックの修道士とがソドミーに結びつけられて、悪徳的な情欲の表象となっているのである。

初期近代では、ソドミーとは単に異端者を異端者そのものとして糾弾するための言葉ではなかった。自分たちではコントロールできない自然災害や不幸な出来事を外国からもたらす者として、スケープゴートのように機能していた言葉のひとつに、ソドミーが存在していた。例えば宗教改革後のイングランドでは、イエズス会士は飢饉や火災を引き起こし、またピューリタンに扮して議会に忍び込んでいると恐れられていたが、ソドマイトたちは彼らと同じ文脈に登場していた (Bray, 1981, pp.26-7)。ここで重要なのは、イエズス会士は宗教改革後に大陸からやってきた異教徒を指していたということだ (Bray, 1981, p.27)。イングランド国教会の信徒らによって、イエズス会士やソドマイトたちは国家転覆の危機をもたらす者として非難されたが、彼らは国内で誕生したのではなく、外国からやってきたと認識されていたのである。

なお、ソドミー的な悪徳が外国からやってきたもの、つまり「自分たち」のテリトリーから発生したものでないというイメージは、「バガリー」の語源がブルガリアであり、キリスト教内の対立から発生したことにも共通している。第二節で論じたように、この言葉はイタリアやフランスを通してイングランドへと伝わり、1534年に制定されたバガリー法は、主にカトリックの人々を処罰するために用いられた。12世紀には大陸のカトリック教徒がカタリ派を迫害するのに使用した「バガリー」が、16世紀のイングランドでは、大陸からイングランドへやってきたカトリックを、まったく同じ理由で迫害する語として用いられたのである。

### 3-3 身体の接触とその強要

初期近代のホモエロティシズムが現代のホモセクシュアリティと大きく異なる点のひとつは、前者は男性間の身体的な接触が前提とされていることである。そしてその接触は、多くの場合、支配的な立場にある者から非支配的な立場にある者に対して半ば強制的に行われていた。

例えば図2《ガニユメデスのレイプ》<sup>7</sup>では、鷲の姿に変身したゼウスに誘拐されたガニユメデスが、誘拐の張本人であるゼウスにしがみついている様子が描かれている。もしもゼウスの支配から逃れようとするれば、ガニユメデスは遥か下の地面に落とされて死んでしまう。鷲あるいはゼウスとガニユメデスの身体的接触は、ゼウスからガニユメデスへの欲望から始まり、ゼウスが望むかたちで行われる。またその身体的接触が継続されるかどうかは、ゼウスの手のうちである。

また、クリストファー・マーロウの長編詩『ヒーロウとリアンダー (Hero and Leander)』(1593年頃初版)でも、強制的な男同士の身体接触が表現されている。この物語では、人間の青年リアンダーが少女ヒーロウに会うためにヘレスポントス海峡を泳いで渡ろうとするが、その途中で彼をガニユメデスだと誤解した海神ネプチューンに追いかける。

The lusty god embraced him, called him love,  
And swore he never should return to Jove.  
(651-652)

色欲の王 [ネプチューン] はリアンダーを抱きしめ、愛しいと呼びかけ、  
そして永遠にジュピターのもとへは返さないと誓った。

特別な力を持たない人間リアンダーは、ネプチューンの身体的束縛から逃れようとするれば、海の波にのまれてしまう。溺死したくなければ、ネプチューンに自らの身体を預け、また身体を晒し、ネプチューンから“the sea should never do him harm”「海が彼に二度と悪さをしないよう」(664行)にする力を持った腕輪を与えられるしかないのである。

このようなある意味でむりやりの身体接触は、初期近代イングランドのバガリー法で裁かれた成人男性と少年との性交と類似している。エリザベス一世とジェームズ一世の治世でバガリーあるいはソドミーの罪で実際に裁かれたのが六人だけであったのは上述のとおりだが、そのすべてが少年相手の行為であった(Wells, 2010, p.34)。1569年の記録では、五歳の少年とソドミーを犯した罪で、男が絞首刑にされている(Wells, 2010, p.34)。Bruce R. Smithはこの史実に対して、法の言説から読み取れることは、成人男性が少年を強姦したことの強調であると述べている(Smith, 1994, p.53)。

このように、男性間の性的な関係がホモエロティックな表現であれソドミー的な罪であれ、初期近代においては身体の接触、特に強制的な身体の接触を伴うものであった。ソドミーとホモエロティシズムははっきりと分断されておらず、重複の可能性を孕んでいたが、このふたつの領域を行き来し、常に曖昧な存在であったのが、少年である。次項ではこの少年の表象について論じ、本論文のまとめとしたい。

### 3-4 少年への欲望

実在であれ空想であれ、少年は成人男性のホモエロティックな欲望の対象となる、あるいは成人男性がソドミーを犯すことの引き金となる可能性を持っていた。彼らは成人男性の欲望の受け手、あるいは被害者にもなることもあれば、成人男性をたぶらかすふしだらな誘惑者にもなり、一元的に定義はできない存在であったが、ホモエロティックな文脈にしろソドミー的な文脈にしろ、少年が成人男性にとって性的魅力を持ちうる点は共通していた。

図1に示したコレッジョの《ガニユメデスの略奪》で描かれる少年にはソドミー的嫌悪は含まれておらず、むしろ美しいものとして描かれている。しかし同時に、上半身に布を巻きつけただけのガニユメデスは、鑑賞者に挑発的な視線を向けているのである。また、上述した長編詩『ヒーローとリアンダー』には、海神ネプチューンがリアンダーの気を引こうと、羊飼いが美少年と戯れる物語を話す場面がある。

How that a shepherd, sitting in a vale,  
 Played with a boy so lovely fair and kind,  
 And for his love both earth and heaven pined;  
 (678-680)

それはひとりの羊飼いが谷間にいて、  
 なんとも美しく優しい少年と遊ぶ話、  
 彼への愛は、地球と天国が思い焦がれるほど。

この劇中劇は《ガニユメデスの略奪》と同様に牧歌的な美しさを含むが、やはりこの美しい少年は性的な魅力をあわせ持つ存在であることが読み取れるのである。

その一方で、少年の性的な魅力は嫌悪すべきものであると表現される場合もあった。例えばジョン・ダンの詩集『諷刺詩 I』(1633年初版)で「[...] 太って汚れた売女や、/ 色を売る少年の、一糸まとわぬ裸を楽しむことを [...] (37-8行)」と並列されているように、少年は売春婦と同じように、男を不適切に誘惑する存在にもなりえた。アラン・ブレイは、王党派詩人ウィリアム・ドラモンドの詩の一節「美少年の淫らなことばは / 思いどおりにあやつる力をもっている」を引用して、国王が少年の誘惑に屈しないようにと詩人が神に祈ることがあったと述べている(ブレイ, 2013, p.20)。

初期近代の人道主義者たちのなかには、同性同士の性交渉、少なくとも成人男性と少年のあいだで行われる性交渉をはっきりと批判した者もいたが、これはつまり、少年が性的に魅力を持っていることが認識されていた可能性の表れでもあった(Wells, 2010, p.34)。性的魅力を備えた、少なくともその可能性を持った存在であったため、少年はエロティックな欲望の受け手であるとともに、社会の秩序を乱す者として批判の対象でもあったのである。そして、初期近代のイングランドにおいて、この少年に対する欲望と嫌悪が混在していたのが、劇場とそれを取り巻く批判であった。

劇場を社会秩序に反する悪徳なものとなし批判する例は多くあり、特にジョン・グリーンら批評家は厳しく批判していた。そうしたなかで、劇場あるいは演劇文化は性的な悪徳と結びつけて批判されることが多かった。そもそもロンドンの大衆劇場は文字通り境界の外、つまり中心地や大通りから外れた場所に位置しており、それが社会秩序への脅威だという批判の拠り所のひとつであった(バウズマ, 2012, p.172)。というのも、大通りから外れた場所には売春宿があり、劇場もその近くにあったのである(Wells, 2010, pp.26-7)。また当時の戯曲は、劇場のみの機能をもった大衆劇場だけでなく、宿泊宿(イン)でも上演されることがあったが、こうした宿泊宿は売春ビジネスと切り離せないものであった。実際、フィリップ・ヘンスローやエドワード・アレイン、ジョージ・ウィルキンスなど、シェイクスピアとも仕事をしていた興行主のなかには、売春を行う宿屋や売春宿のものにも関心を持っていた者もいたのである(Wells, 2010, p.14)。16世紀後半にはロンドン市から四つの宿泊宿に劇の上演を行う許可が下りていたものの、1594年にシアター座とローズ座にのみ上演許可が与えられたのと同時に、これらの宿泊宿は全て、劇場としてのビジネスは禁止されることとなった(Shakespearean London Theatres, 2013)。

ところが、宿屋での上演禁止によって売春と演劇文化の同一視するような批判がなくなったわけではなかった。というのも、当時の俳優も現代の俳優と同じように憧れやゴシップの対象であり、Stanley Wellsは、シェイクスピアの時代の成人俳優は女性客だけでなく、少年俳優とも性的な関係を結んでいたという噂が広まっていたことを指摘している(Wells, 2010, pp.14-5)。こうした噂が真実だとしても、結局のところは嘘だったとしても、成人俳優と少年俳優の性的な関係がゴシップとして広まっていたこと自体が、好色的な目であれ批判的な目であれ、少年俳優が成人男性にとって性的魅力を備えているという思考が不自然でなかったということである。

舞台の上に立つ少年俳優が欲望の対象になるとともに、批判にも晒されることとなっていたのは、彼らが異性装をしていたことも関係している。エリザベス朝とジェームズ朝では、女性が舞台に立つことが法で禁じられていたため、女性役のほとんどは声変わり前の少年によって演じられていた。ピューリタンのフィリップ・スタップスは、『悪習の解剖』(1583年初版)のなかで、服装は人々がモラルを守るのに重要な役割を果たしていることを論じ、異性装は自己の混乱を招く悪習であると示した(バウズマ, 2012, p.187)。

少年が舞台に立つこと、そしてその際に女性の装いをするとは、その性を曖昧にすることよりも多くの意味を持つ。少年は成人男性にとって性的な欲望の受け手に、あるいは誘惑者にもなりうると考えられた存在であった。また、同時代の人々が劇場と売春あるいは売春宿を結びつけて批判していたことは、演劇文化を意識的に悪徳なものに見做していたということだが、その一方で、こうした批判は、少年俳優が性的魅力を持ち合わせていたことを示すものでもある。

舞台の上で観客や成人俳優の視線にさらされる少年俳優は、ゼウスを魅了したガニュメデスと同じように性愛の対象にもなりうるが、同時に、劇場空間を批判する人々にとっては、ソドミー的嫌悪の対象にもなる存在であったのである。

## むすびに

ここまでの議論で、イングランドを中心とした初期近代キリスト教圏における男性間の性的、あるいは身体的接触にまつわる表象について、絵画や詩、また聖書などのテキスト分析を行い、ホモエロティックな表現とソドミー／バガリーという非難の共通項を明らかにした。Quinsland はソドミーをホモフォビアと同義とし、それがホモエロティックなものへの非難だと論じたが、本研究ではホモエロティックな表現とソドミー／バガリーが、どちらも異教あるいは異郷の他者の表象であり、二人のあいだに強制的な身体的接触が生ずることを前提とし、成人男性から少年への欲望をあらわにしていることを明らかにした。

クリストファー・マーロウの『ヒーロウとリアンダー』のような芸術作品における同性愛的な表現からは、主体たる男性がはっきりと若い男性に対して欲望の眼差しを向けていたことを読み取ることができる。また、演劇と少年俳優が批判の対象となっていたことは、同時代の批評家たちも少年が誘惑的であったことを認めていたことを表している。しかしながら、演劇において少年俳優が演じた役柄は単一ではなく、戯曲によって若い女性役や中年の女性、また少年役を演じることもあった。また、近年の研究では、演じる「少年」の年齢も声変わり前の子どもから声変わり後の若い青年まで幅広かったことが指摘されている<sup>8</sup>。しかしながら、演じる役柄やその俳優の個人差によってホモエロティックな表現のあり方、あるいはソドミーとしての非難のあり方が異なっていたのかの研究は不足している。今後、少年俳優が演じた役柄の比較分析を行っていくことで、初期近代イングランドにおける少年の表象が単一でなかった可能性を見出すことができるものと考えられる。

<sup>1</sup> 聖書の引用は、1568年にロンドンで発行され、流通していたビショップ聖書（The Bishop's Bible）による。日本語への翻訳は、一般財団法人日本聖書協会による日本語訳を参考に筆者が行なった。また、本論における日本語訳はすべて筆者による。

<sup>2</sup> 例えばレビ記には“Thou shalt not lye with mankynde as with womankynde, for it is abbonination.”（The Bishop's Bible, Leviticus 18: 22）「あなたは女と寝るように男と寝てはならない。それは忌むべきことだからである」（レビ記 18: 22）と記載されている。こうした同性愛非難に用いられる聖書のテキストは、しばしば clobber texts（酷評テキスト）と呼ばれる（Greenough, 2020, pp.98）。

<sup>3</sup> チュルク系遊牧民のブルガール人が681年にビザンツ帝国と和平条約を結び、ブルガリア（ドナウ・ブルガリア・カン国）が誕生した（金原, 1998 / 2004, p.58）。ブルガール人は伝統的にシャーマニズムを信仰していたが、建国当初からキリスト教も存在しており、領土の拡大とともに増加していった（金原, 1998 / 2004, p.67, p.74）。

<sup>4</sup> バガリー法の施行のみによってカトリック教との分断が強まったわけではなく、ヘンリー八世はたびたびカトリック教に対して強固な姿勢を見せ、また宗教の分野における王の権力を強めようとした。カトリックの修道院閉鎖やトマス・ベケット（1117/18-70）の聖遺物に対する破壊命令はその一環である（テュヒレほか, 1997 / 2007, p.172）。また彼は、政府が召集した教会総会に対して、王が国内における教会の首長であると宣言することを要求し、絶対王政的な国民教会を築こうとした（テュヒレほか, 1997 / 2007, p.169）。

<sup>5</sup> 男から女に対して行われる強姦は、膣性交であれば生殖の可能性があるため、夫婦間の性交と同じ扱いになることもあった。強姦を行うことは罪であったが、その後に強姦した男とされた女が結婚すれば、男は無罪になったのである（Phillips and Reay, 2011, p.58）

<sup>6</sup> ローマ名はフリアイ、ギリシャ名はエリーニュス。主として肉親間の、特に殺人やその他の自然の法に反する罪を追及する女神たちの名称（高津 1960 / 1972, p.72）。ここでも、自然に反する肉体の罪であるソドミーのイメージが用いられている。

<sup>7</sup> 初期近代では、rape は「～を強姦する」の意味だけではなく、「～を無理やり奪う、誘拐する」を指すことにも用いられていた。

<sup>8</sup> 木村（2019）による『モルフィ公爵夫人』の公爵夫人を演じた少年俳優の分析を参照。

## 参考文献

- Aquinas, Thomas. *Summa Theologiae II*. Corpus Thomisticum.  
 <<http://www.corpusthomicum.org/iopera.html>> [accessed 20 October 2021]
- Bailey, D. S. (1955). *Homosexuality and the Western Christian Tradition*. Longmans.
- Bishop's Bible, the. (1568). Internet Archive. <https://archive.org/details/holiebiblecontey00lond/page/n205/mode/2up?q=levis>  
 [accessed 20 October 2021]
- Bray, Alan (1981). *Homosexuality in Renaissance England*. The Gay Men's Press.
- Clark, David (2013). Marlowe and Queer Theory. in Emily C. Bartels & Emma Smith (Eds.), *Christopher Marlowe in Context* (pp.232-241).  
 Cambridge University Press.
- Emmison, F. G. (1999). *Elizabethan Life: Home, Work and Land*. Essex Record Office Publications.
- Great Britain, Raithby, John, & Tomlins, Thomas Edlyne (1811). *The Statutes At Large, of England And of Great Britain: From Magna  
 Carta to the Union of the Kingdoms of Great Britain And Ireland*. G. Eyre and A. Strahan. <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=njp.32101075729275&view=1up&seq=186> [accessed 30 October 2021]
- Greenough, Chris (2020). *Queer Theologies: The Basics*. Routledge.
- Johnson, Paul (2019). Buggery and Parliament, 1533-2017. *Parliamentary History*, 38 (3), 325-341. <https://doi.org/10.1111/1750-0206.12463> [accessed 21 October 2021]
- Marlowe, Christopher (2011). *Edward II*. Brian Gibbons (Ed.), Bloomsbury Publishing.
- Marlowe, Christopher (2020). *The Complete Works of Christopher Marlowe*. Shrine of Knowledge.
- Orgel, Stephan (1996). *Impersonations: The Performance of Gender in Shakespeare's England*. Cambridge University Press.
- Phillips, Kim M., & Reay, Barry (2011). *Sex Before Sexuality: A Premodern History*. Polity Press.
- Quinsland, Kirk (2017 / 2020). The Sport of Asses: A *Midsummer Night's Dream*. In Goran Stanivukovic (Ed.), *Queer Shakespeare: Desire & Sexuality* (pp. 69-86). The Arden Shakespeare.
- Shakespearean London Theatres (2013). Bel Savage Inn, 1575-95: Inn Used for Plays. In *ShalT Shakespearean London Theatres*.  
 De Montfort University. <http://shalt.dmu.ac.uk/locations/bel-savage-inn-1575-94.html> [accessed 30 October 2021]
- Smith, Bruce R. (1994). *Homosexual Desire in Shakespeare's England: A Cultural Poetics*. The University of Chicago Press.
- Stanivukovic, Goran (2006). Between Men in Early Modern England. In Katherine O'Donnell & Michael O'Rourke (Eds.), *Queer Masculinities, 1550-1800: Siting Same-Sex Desire in the Early Modern World* (pp.232-251). Palgrave-Macmillan.
- Stymeist, David (2004). Status, Sodomy, and the Theater in Marlowe's *Edward II*. *Studies in English Literature 1500-1900*, 44(2), 233-253.
- Wells, Stanley (2010). *Shakespeare, Sex, and Love*. Oxford University Press.
- アキナス、トマス (1991) 『神学大全 XXII』 渋谷克美訳、創文社  
 一般財団法人日本聖書協会「聖書を読む」 [https://www.bible.or.jp/read/vers\\_search.html](https://www.bible.or.jp/read/vers_search.html) [accessed 11 July 2021]
- 金原保夫 (1998 / 2004) 「バルカン史の黎明」 柴宜弘編『新版 世界各国史 18 バルカン史』 (pp.56-119) 山川出版社
- 木村明日香 (2019) 『『モルフィ公爵夫人』における少年俳優の舞台上の効果』 関東英文学研究, 11 号, 39-50.
- 呉茂一 (1969 / 1970) 『ギリシア神話』 新潮社
- 高津春繁 (1960 / 1972) 『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店
- ダン、ジョン (1996) 『ジョン・ダン全詩集』 湯浅信之訳、名古屋大学出版会
- テュヒレ、ヘルマン ほか (1997 / 2007) 『キリスト教史 5 信仰分裂の時代』 上智大学中世思想研究所編訳／監修、平凡社
- バウズマ、ウィリアム、J. (2012) 『ルネサンスの秋—1550-1640』 澤井繁男訳、みすず書房
- バフ、ヘルムート (2009) 「初期近代のヨーロッパ (1400-1700)」 ロバート・オールドリッチ編『同性愛の歴史』 (pp.78-101) 田中英史、  
 田口孝夫訳、東洋書林
- フーコー、ミシェル (1986 / 2009) 『性の歴史 I —知への意志』 渡辺守章訳、新潮社
- ブレイ、アラン (2013) 『同性愛の社会史【新版】 イギリス・ルネサンス』 田口孝夫、山本雅男訳、彩流社
- ヘルゲメラ、ベルント＝ウルリヒ (2009) 「中世」 ロバート・オールドリッチ編『同性愛の歴史』 (pp.56-77) 田中英史、田口孝夫訳、  
 東洋書林